

## ◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載 ◆ 第23回/戦後の朝香宮邸(後編) — 白金迎賓館

### Residence of Prince Asaka 1933—

建物が後世に残る命運の分かれ道はどこにあるのでしょうか。戦後、GHQの建物接管により戦前の趣のある多くの建築が改装されました。その状況下で旧朝香宮邸は接管を免れ、奇跡的にも創建当時の面影をいまま留めています。

吉田茂首相の公邸として政府に借り上げられていた旧宮邸は、1950(昭和25)年10月に売買により西武鉄道の所有となりました。当時はまだ首相公邸時代です。西武鉄道堤康次郎社長は次のように部下に託し外務省担当者に伝えたということです。「吉田首相を迎賓館のことで悩ませるようなことはしないでほしい。外務省の予算の目途がついて買いとるならそれでも結構。とにかく予算の枠内で、吉田首相が迎賓館にいつまでも住めるようにしてあげてください」\*1 この後、旧宮邸をめぐる険悪であった吉田首相と堤社長の関係は徐々に改善したとのこと。



図2

昭和29年12月の吉田内閣退陣後、公邸としての役割を終え、翌1955(昭和30)年4月からは国の迎賓館として各国国賓32名の方を迎えたということです。昭和37年には本館である旧宮邸に隣接して迎賓館新館が建設され、赤坂迎賓館が完成する1974(昭和49)年まで、戦後の政治・外交・経済の発展に大きく貢献しました。

その後は、白金プリンス迎賓館として、旧宮家施設は催事、結婚式、宴会、会議などの場として使用されました。当時のパンフレットには由緒ある建物の歴史が写真とともに数ページに渡り紹介されています。朝香宮邸当時の家具、調度品もそのまま置かれているのが印象的です。



図1

宮家関係者の言葉から西武・堤家との関わりをかいま見ることができます。「あの家は戦後、政府が借りて芦田首相、吉田首相が住まれた後、西武の堤康次郎さんに売ったものですから、堤さんとは戦後ずっとおつき合いがあったようです。堤さんとの話し合いで、上京してきますと白金の家へ来て一休みして、東京では堤さんが持っているお家に泊まっておりました。父は、昭和56年4月12日熱海で亡くなりました。葬儀は、皇族の墓所である豊島岡で行われましたが、通夜は母との思い出深い白金の家で挙行されました。年齢93歳の人生でした。」\*2

歴史の荒波をくぐり抜けた幸運は、朝香宮ご夫妻の思いが込められた世界的にも希有な「建物のちから」にあったのかもしれない。(高波) ◆



図3

\*1.中嶋忠三郎「西武王国」  
2004年  
株式会社サンデー社

\*2.「朝香宮邸のオール・デコ」  
1986年  
財団法人東京都文化振興会

図1.由井常彦編「堤康次郎」  
1996年  
株式会社エスピーエイチ  
「観桜会(白金迎賓館)にて(昭和36年3月)」左から佐藤栄作、池田勇人、吉田茂、堤康次郎。

図2.同「白金の迎賓館」  
首相公邸、迎賓館時代は建物一面が為で被われていた。

図3.白金プリンス迎賓館大広間  
(同館閉館記念アルバムより)  
\*椅子はオリジナル。竣工当時は無地だが張替えて柄模様になっている。正面暖炉横のレリーフも宮家当時のもの、右手前の大大理石レリーフと同じ制作者ブランチン作と伝えられる。